

さきたま抄

「3時38分」を指して止まった時計、床の一部が抜け落ちた体育館…。埼玉県内に配置された福島県浪江町復興支援員らの活動に同行し、避難指示が解除されていなかった町内に足を踏み入れた2014年5月、町立請戸小学校で目にした光景を思い出した▼浪江町震災遺構検討委員会は2月8日、東日本大震災による大津波と東京電力福島第一原発事故に見舞われた請戸小の保存を答申した。建造物の震災遺構は、福島県初という▼あす11日は、震災8年の節目。復興庁によると、福島など被災各県から県内に避難している被災者は3475人(2月7日現在)もいる▼法政大学教授の西城戸誠氏と金城学院大学講師の原田峻氏は2月、震災発生直後から7年半の県内支援活動を考察した「避難と支援―埼玉県における広域避難者支援のローカルガバナンス」(新泉社)を出版した。両氏とも県内で被災者支援活動に関わりながら、社会学者として支援の全体像を検証。課題を指摘している▼両氏は今後、活動と調査を継続する考えだ。「いつまでこの調査・支援を続けるべきか、…そこに広域避難者支援というテーマの本質がある」と書く▼原発事故の避難者に対して、国は早期の帰還政策を進める。そうした状況で、県内避難者の実像が見えなくなってきた。だからこそ、彼らを忘れず寄り添い続けること。また8年、震災は終わっていない。

2019・3・10